

調和型農業 指針探る

越前市

現場と専門家 討論

コウノトリ大作戦 最終日

くちばしの折れたコウノトリ「コウちゃん」の越前市飛来40周年を記念した「コウノトリが舞う里づくり大作戦」(記念事業実行委員会主催、越前市、福井新聞社、NPO福井放送局共催)は最終日の7日、同市武生五中で環境調和型農業を考えるパネル討論を行った。現場の農業者や専門家が生産技術確立に向けた悩みや解決のヒントを出し合い、コウノトリとの共生の鍵を握る農業のあり方を模索した。



「生き物を育む田んぼ」をテーマに議論が交わされたシンポジウム。7日、越前市武生五中



コウノトリ野生復帰に取り組み兵庫豊岡市で農業や化学肥料に過度に頼らない「コウノトリ育む農法」の確立と普及に努めた同県環境創造型農業専門員の西村いつきさん、本県のエコ農業推進を担当する農食の安全安心課の田中英典さん、越前市白山・坂口地区で無農薬無化学肥料の米づくりを手掛ける「コウノトリ呼び戻す農法部会」会長の恒本明勇さんがパネリストを務めた。

恒本さんは、雑草に悩まされ収量が落ち込んだことを報告。「生産技術を確立して経済的に成り立たせ、地域に農法を広めたいが、課題山積で試行錯誤の連続。行政の助言や支援も求めたい」と悩みを口にした。これに対し西村さんは「まず敵を知る。雑草の生態を科学的に把握し、適切に対応してこそ有機農業」と指摘。豊岡でも当初は雑草や病害虫に見舞われ周囲から中傷を受けたものの、水管理の徹底やコマと大豆の輪作に取り組みむなどして抑草効果を挙げってきた経緯を紹介し「失敗は成功の種。最後まで責任を持ってくれる地元の普及員や有機農業の先進、専門家とスラムを組んで」と励ま

やり方」と助言。普及員やエコ農業者との情報交換の場を積極的に設ける意向も示した。会場を埋めた地元農家を環境調和型農業のあり方を一緒に考えた。

ら約1000人は、生き物と共生し、地域活性化につながる可能性を秘めた環境調和型農業のあり方を一緒に考えた。